



シンポジウム

開会にあたって

後山 尚久 先生

大阪医科大学 産婦人科



1979年 大阪医科大学卒業
 1981年 同大学産婦人科 助手
 1989年 米国オクラホマ州立大学生化学・分子生物学部門 教官
 1993年 大阪医科大学産婦人科 講師
 1996年 同大学産婦人科 助教授

東洋医学シンポジウム「こんな時には漢方を」—各科別漢方の生かし方—は、今年で11回目を迎えます。本シンポジウムは昨年までは富山医科薬科大学 寺澤捷年教授のコーディネートのもと高い評価をいただきながら開催されてきました。

このような東洋医学会の重要かつ伝統ある学術集会のコーディネーターを、本年から、私がおその役を担うように依頼を受けました。従来の優れた点を最大限生かしながら、その役を果していきたくと考えています。

本日も、各シンポジストの先生方から各科領域における漢方治療の具体的な症例をご呈示していただく予定です。さらに、コメンテーターとして、漢方専門医のお立場から峯尚志先生にもご意見をいただき、西洋医学的な理論と東洋医学的な解釈をうまくすり合わせしてみたいと考えています。

漢方医療は、病因の概念、診察方法、診断へのアプローチ、治療薬の選定すべてにおいて、かつて欧米で発展した医療体系とは異なった点ばかりが目につきます。だからこの2つの医療体系は相容れないというわけではありません。むしろ、西洋医学的な細胞病因論的分析による直線化、一般化と、東洋医学的な宇宙論的、心身一如的分析による複雑系としての認識が、目の前の助けを必要とする病む人の病態を、多角的に理解し分析することに相補的に対応できる早道であることを知るべきです。

人類が求める医療とは何か、今自分の施す医療が病む人に満足を与え、少しでもquality of lifeを高めているかを問いながら、漢方医療の意味と臨床的意義を探求したいと思えます。

本シンポジウムでは、治療者それぞれの医師としてのスタンスと個性を尊重しながら、西洋医学を基盤とした漢方への取り組み方を紹介致します。

本日も、日常診療に必ず役立つような漢方の生かし方をお伝え出来ることと思っていますので、ご期待ください。

こんな時には

各科別漢方の生かし方